

円満寺報

第 174 号

平成 30 年 6 月 15 日発行

天台宗 別格本山 安禅院円満寺

〒220-0061 横浜市西区久保町50-1

電話 (045) 231-4383

F A X. (045) 241-4499

http://enmanji-yokohama.jp/ e-mail:enmanji@xb3.so-net.ne.jp

一隅を照らす神奈川相模大会開催さる



安禅院第四十世 住職 西郊良光
円満寺第五世

平成三十年度の神奈川教区の「一隅を照らす運動」は五月三十一日、午後一時より、平塚市のカルチャーボンス平塚で開催されました。会場には四百名を超える人々が参集され大いに盛

講演する当寺住職

り上がる大会となりました。今年度の大会は、教区の相模部の担当という事で、平塚市において開催されたのであります。

先ず第一部では法要が勤修されました。教区の榎本所長を導師に、相模部の住職三十名の出仕により、一隅を照らす法要が厳かに行われました。来賓として天台宗の法人部長、一隅を照らす本部長が臨席し、法要に参加されました。

法要の後、一隅募金の贈呈式が行われ、所

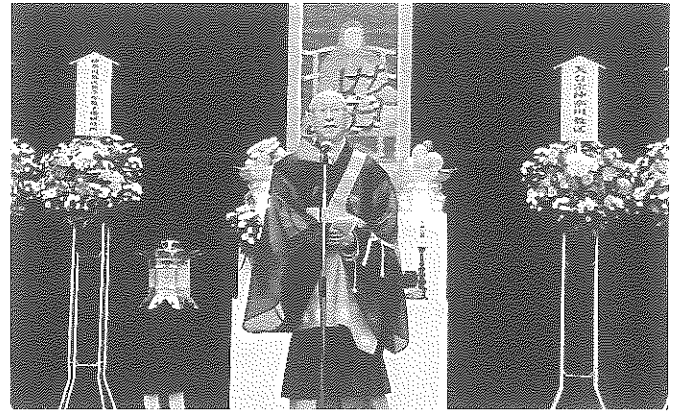
長の榎本大僧正より、先ず一隅を照らす運動総本部長に一隅募金の中から、救済募金が贈られました。また、神奈川県福祉財団の理事長にも一隅募金より三十万円が贈呈され、財団の理事長様は生活困難者のために使用させて頂きたいとお礼が述べられました。

第一部終了後、第二部に入り、講演が行われました。講師は当寺住職西郊良光師で、「法華経の世界」と題し、一時間二十分の講演が行われました。

当寺住職は、昨年行われた「東南寺説法」の様子を語りながら、法華経の持つ特色、世界について丁寧に説明しながら、天台大師、伝教大師が何故法華経を重視し、教えの中に取り入れたのかについて詳細な説明が行われたのであります。聴衆の方々もその講演を聴き、その経について理解を深めたと思われまふ。講演の終了後謝辞が述べられ、一隅大会は無事終了したのであります。



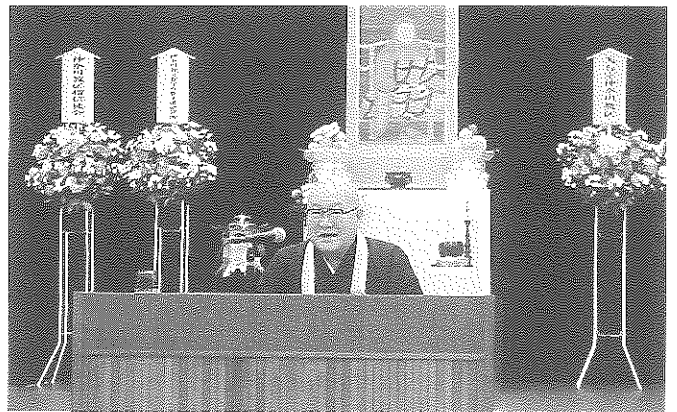
神奈川教区各僧侶出仕の法要



大会会長の挨拶



研修所所長の挨拶



講演の模様



雨の中行進する参加者



奉納された灯ろう

韓国花まつりに招待さる

韓国宗団協議会の日韓仏教交流協議会に対する、花まつりに招待するのは是非出席して欲しいとの申出により、日本を代表して当寺住職ほか二名が出席したのであります。

五月十二日に花まつりは行われ、今年は雨の中、それでも三十万人の人々が出席し、灯ろうを持ちながら、市内を行進したのであります。

先ず式典が行われ、東国大学のグラウンドに集まった人々の中で灌仏が行われ、

れ、当寺住職は甘茶を釈迦像にかけ、その御徳を讀いたのであります。

韓国の当日は国家の休日となり、多数の方々がその行事に参加されており、日本では考えられない行事で、メインストリートを提灯を手に練り歩くその姿は、正に釈尊の誕生を喜んでいる姿でありました。日本と比べその壮大さに感嘆して帰国しました。

盂蘭盆会によせて

今年も盂蘭盆会(お盆)の時期がやってまいりました。大切な行事ですであらためてお迎えについて書いてみたいと思います。

お盆は御先祖様があの世から帰ってくるのをお迎えをする期間、と考えられています。お釈迦様がお弟子さんの母が亡くなった後「あの世で母が苦しんでいるのが見える」と悩むお弟子さんに対し、「母を救う為には様々なご供養をなささい」と説かれたのがはじまりである、とされています。同じように考えがちですが、お彼岸は「春分の日」「秋分の日」を中心とした行事であり「この世とあの世が一番近くなる日」なので「ご供養をする期間」です。

お盆を迎えるにあたり、正式には精霊棚とよばれる棚を作りまします。竹で骨組みを作り、棚の上にもちものごさを敷きます。季節の野菜や果物、ナスの牛、キュウリの馬などをお供えします。また、机を用意し、ご先祖様のお位牌や三具足と呼ばれるもの(ローソク立て、線香立て、花立て)を配置して準備をします。そして、お盆の入り日(正式には十三日)に迎え火を玄関で焚き、盆の終わりにはご先祖様に帰っていただくために送り火を十五日、もしくは十六日に焚きお送りいたします。

悲しいことですが、お身内の方が亡くなってしまったという場合、四十九日過ぎた後に迎える初めてのお盆を「新盆(にいぼん)」と呼び、特にねんごりにご供養をいたします。

お盆の時には提灯を飾りますが、新盆の場合は白提灯(白く、柄のない無地の提灯)を飾ります。飾った白提灯は翌年に持ち越さずお盆が終わるとお焚き上げ(お経等で「供養しながら燃やすこと)し処分をいたします。一方、柄のついた提灯は毎年飾ってよい、とされています。

お盆の慣わしはこのようなものです。地域によっても差があります。また、近年は住宅事情等により「棚が飾れない」「火が炊けない」「仕事の関係で家族が集まらない」等々、様々な相談がお寺に寄せられます。お寺では「正式にできるに越したことはないが、できる限りの事をしてあげてください」とお答えするようにしております。

こうした昨今の事情を受け円満寺では毎年、新盆のご供養、お盆のご供養と日にちを分け大法要を行っています。ご自宅でご供養がままならないとお考えの方は、是非お寺やお墓地に足をお運びお参り下さいませ。

(良嘉記)

円満寺勤行儀 第十一回

前回に引き続きまして般若心経の解説になります。今回は、観自在菩薩が説いている空について「死の苦しみ」ということを例に挙げ、死そのものから逃れられない事と、老いや死からくる苦しみから逃れられない事は、イコールではないことを述べました。

あらゆる事象は、それが無くなることもまた得るということもない「空」なのだということ。般若波羅蜜多の智慧だということです。だから菩薩(修行により仏様と同じ智慧に到った悟りを求める者)は、苦しみの原因が苦しみそのものではないと知っている、心にこだわりが無く、こだわりが無いから恐れることもないと、解説しました。続いて結末部分に入ります。

『三世諸仏。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。』

(さんぜしよぶつ えほんにやはらみったとくあのかたらさんみやくさんぼだい)

現在、過去、未来にいらつしやる諸々の仏様は、空の智慧の完成によって、この上ない真実のさとりを得たのです。『阿耨多羅三藐三菩提』というのは音写語で、最上の完全なさとりの意味です。

また「菩薩」が「般若波羅蜜多」によって「涅槃」に到るといつ、この前の文章と同じ意味で「諸仏」が「般若波羅蜜多」によって「菩提を得る」と書かれています。

『故知。般若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是无上呪。是无等等呪。能除一切苦。真实不虚故。説般若波羅蜜多呪。即説呪曰』

(こち。ほんにやはらみった ぜだいじんしゅ ぜだいみょうしゅ せむじょうしゅ せむつじょうしゅ のうじょうしゅ せんじつおご せつほんにやはらみったしゅ そくせつしゅつわつ)

空の智慧は仏さまの智慧と同じであり般若波

羅蜜多」は、摩訶不思議なことばであり、偉大な言葉であり、他に並ぶものがないことばです。このことばは、すべての苦しみを除き、真実で偽りがありません。その「般若波羅蜜多」のことばとは、このようなものです。

『羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶。般若心経』

(ぎゃてい ぎゃてい はらぎゃてい はらそうぎゃてい ほじそわか ほんにやしんぎょう)

この「ぎゃていぎゃてい」以下の部分は、サンスクリット語(古代インド語)から漢字に翻訳された際も、あえて元々の音を残して漢字にしましたので、いわゆる当て字のような部分です。その意味はこのようになります。

行ったものよ。行ったものよ。向こう岸に行った者よ。さとりしものよ。祝福を。

最後の般若心経の文字はサンスクリット原本にはなく、漢訳された際に縮める意味で経名が付け加えられました。

これまで般若心経では「五蘊(ごごん)はみな「空」であり、「諸法」が「空相」であることを理解する」とが、般若波羅蜜多の智慧だと説明してきました。最後は、真実のことば、即ち「ぎゃてい ぎゃてい ……般若心経」の呪を唱えることで、唱えた者と真理とが一体化するという呪(マントラ)で経がおわりになります。

これで般若心経の解説は終わりになります。般若心経は観自在菩薩が舍利子に向かって説法をしている場面が描かれていますが、そもそもお経は、それを読んで唱える人に向けられた仏教の教えです。なので、そのお経を読んで唱えている私たちに向かって説かれているのです。

そうすると、般若心経で説かれている「空」というのは、私たちが苦しみや悲しみに直面した時、その感情に全てがとられてしまわないようにと、そう書かれているような気がします。